人間の弱み

“限りないもの、それが欲望（井上陽水）[1]”

この節では、人間の生物としての弱みについて考えてみましょう。強力な機能は、その利点の裏返しとして、大きな欠点をも有するものです。人間の直立２足歩行と重い脳は、安定を保つことが難しく、腰に過大な負担がかかりやすく、疲労しやすい構造となっています。また、エネルギーや酸素の消費量の大きな頭のてっぺんにまで、血液を運ぶ必要があるため、4 足歩行に比べて、心臓により大きな負荷がかかります。口呼吸により扁桃腺を含む腔内環境が病原菌などに感染しやすく、多くの免疫系疾患の原因になっています。肥大化した前頭葉（脳）は、あらゆる感情の増幅器（アンプ）です。強い快楽が得られると、ドーパミンという快楽ホルモンが分泌され、脳の報酬系と呼ばれるご褒美回路が駆動し、さらに強い快楽を求めるようになります。脳は、欲望を拡大再生産する装置なのです。成功体験による快楽が、さらなる自己実現のためのモチベーションとして野望・欲望に拡大再生産されれば、イノベーション創出などのプラス方向に作用し､爆発的に社会的遺伝子を高度化･多様化することに寄与してくれます。その一方で、薬物、ギャンブル、ＳＥＸなどの快楽が拡大再生産されれば、依存症に陥り、日常生活を破綻させる危険性を内包しているのです。欲望のプラス増幅だけでなく、マイナス増幅も大きなリスク要因です。欲求不満や、精神的ストレスにより、自己否定や他者攻撃などネガティブで後ろ向きの感情に捕らわれてしまい､それを前頭葉でいじいじと反芻してしまうと、マイナス感情・思考は拡大再生産され、鬱などの精神疾患や犯罪など深刻な症状に発展してしまうことすらあります。感情の増幅器としての前頭葉（脳）は、両刃の剣なのである。

文明の弱みについても考えてみましょう。文明の２つの強み、生物機能の補完・補強と、時間的・物質的余剰の提供、は、利便性および効率性を飛躍的に向上させます。しかし、利便性・効率性の程度と反比例するように､その裏返しとしてのリスクも増大していくのです｡我々は、文明の利便性・効率性というプラス面がもたらす便益（ベネフィット）だけに注目して、人生や行動の戦略の最適解を求めがちであり、それと反比例するように増大する危険性（リスク）を、あまりにもないがしろにしまいがちです。原子力技術は、事故にしろ、故意にしろ、一瞬の誤りで、人間を滅亡させるリスクを有しています。住宅ローンは、考えようによっては、労働年齢期間にわたり資本主義の合法的奴隷として働き手に手枷・足枷をはめる膨大な借金であり、失業すれば自己破産というリスクを負わせています。スマホは、そのログ情報・位置情報から、個人が訪れた場所・購入した物品・接触した人間など技術的には全て記録・把握され、我々の私生活が丸裸にされるリスクを有しています。いずれも、安全・安心で堅牢なシステムだ、と暗黙のうちに信じられ、広く普及していますが、度重なる原子力関連事故、自然災害・会社の倒産など予期せぬ失業による自己破産、個人情報の流出、などが後を絶ちません。それらを見るにつけ、いつか、より重大で致命的なリスクが現実なものになるのではないか、と危惧させられます。文明の３つめの強み、社会の形成と協働、は、他の動物や類人猿に対して圧倒的優位を築く重要な要素であります。その強烈な裏返しとして、人間関係という、やっかいな問題を生じさせました。我々の悩みや精神的ストレスの原因として、健康問題・経済的問題とならんで、人間関係があげられるでしょう。健康で経済的に問題のない子供から大人まで、小さな悩みや気がかりすらない、という人は稀であり、悩みや気がかりのほとんどの原因が人間関係、と言ってもよいでしょう。道徳、宗教、人生相談などは、人間関係の問題解決に、かなりのエネルギーと比重が置かれています。また、４次元世界の自己客観視能力の裏返しとして、どうしても自分を他人と比較したり、過去の自分と比較したりと、自分の時空間的な相対的位置を評価しがちで、それが精神ストレスの引き金となっています。動物は、目の前の視野だけを頼りに、その瞬間・自分だけを生きているわけですが、人間は、もはやそのような純粋で直線的な視野でだけ生きることは、事実上困難になっています。ＳＮＳを一週間使用不可とすることによって、幸福度が優位に上昇するという調査結果があります。ＳＮＳによって他人

と自分を比較して一喜一憂することから解放されるからだそうです。文明の代名詞の１つともというべきＳＮＳにおいて、これです。これほど、文明の光と影を端的に表出した事例も珍しいでしょう。社会形成による強みの反動リスクは、個人的な人間関係だけではありません。最大のリスク要因は、異なる社会同士の紛争（コンフリクト）です。戦争はその最たるものでありましょう。文明によって現在のところ圧倒的優位に立っている人間が、己同士を大量殺戮するリスクを負っているというのは皮肉なものです。人間の天敵は、猛獣でも、感染症でも（注１）、幽霊でも、異星人でもなく、もはや人間そのもの、あるいは、その副産物としての文明そのもの、なのです。

（注１）感染症は依然として猛威を振るっているが、統計では、人類総体としては、感染症のリスクをワクチンなどの最新医学と公衆衛生技術の併用で克服しつつあることを示している（ハンス・ロスリング[2]）。

参考文献

[1] 井上陽水、限りない欲望
[2] ハンス・ロスリング著、上杉周作・関美和訳、ファクトフルネス、日経 BP